

Title	日本語非母語話者教員による日本語読解・ライティング教育に関する期待と課題：漢字圏と非漢字圏の各地域における大学教員への調査から
Author(s)	村岡，貴子；中島，祥子
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2021, 25, p. 85-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79106
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語非母語話者教員による日本語読解・ライティング教育に関する期待と課題

— 漢字圏と非漢字圏の各地域における大学教員への調査から —

村岡 貴子*・中島 祥子†

要 旨

本稿の目的は、海外の漢字圏・非漢字圏の各大学で日本語専攻を担当する日本語非母語話者の教員が有する、日本語の読解・ライティング教育についての期待と課題を、各々の教育実践の内容の一端とともに、明らかにすることである。海外と日本の各大学の間での教育の接続を目標とし、パイロット調査として5名の大学教員から、半構造化インタビューにより情報と知見を得た。その結果、卒業論文への関与や読解・ライティング教育の授業内容等の背景的な差異にかかわらず、どの教員も、大学における読解・ライティング教育の重要性を認識し、学習活動上の種々の工夫を施し、かつ、カリキュラム・授業方法の改善を試みていたと言える。教員それぞれの取り組みは、大学・大学院において、正確な知識提供にとどまらず、学生が主体的に、論理的・分析的に思考を深め、行動できるよう、また引用等の学術的なルール遵守を重視して教育課程修了までに、修了に適した成果を上げることを強く求め続けているものと結論できる。

【キーワード】 読解・ライティング、卒業論文、引用、カリキュラム、論文スキーマ

1 はじめに

本稿の目的は、海外の漢字圏・非漢字圏の各大学における日本語専攻を担当する日本語非母語話者の教員が有する、日本語の読解・ライティング教育についての期待と課題を、各々の具体的な教育実践の内容の一端とともに、明らかにすることである。本研究では、海外と日本の各大学の間での教育の接続を最終目標とし、本稿ではパイロット調査として5名の大学教員から、半構造化インタビューにより情報と知見を得たので、報告する。

本稿では、日本に留学する、あるいは日本の関係の企業などに就職する日本語専攻の学生の事例に着目する。そこで、日本の大学院で博士号取得後に母国の大学の日本語専攻で教鞭をとる教員へのインタ

ビュー調査を行った。

上記の目的で、「読解・ライティング教育」としたのは、大学・大学院レベルで学術的な研究を行う場合には、読解とライティングの双方が、分かちがたく技能複合的に獲得すべき必要な学習内容であると捉えられるためである¹⁾。特に、学部3、4年生といった高学年や、大学院での研究活動においては、文献の読解や引用の作業は、文献からの正確で批判的な情報の入手および自身の研究の位置づけを行うためにきわめて重要なものとなる。また、一般に、日本語専攻の学生は、学部高学年、および大学院の入学前後において、短期・長期の留学も経験することが少なくない。以上のような前提に立ち、本研究では、教育の接続を考慮し、来日後の日本の大学での教育に資する書記言語コミュニケーション能力の向

* 大阪大学国際教育交流センター教授

† 鹿児島大学学術研究院法文教育学域法文学系准教授

上を目指すという最終目標を設定している。本稿はその一環としてのパイロット調査の結果について報告する。以下、こうした日本語による書記言語コミュニケーション教育の充実を目指して行われている関連研究について概観する。

2 先行研究の概観と本研究の位置づけ

昨今、日本語教育学において、ライティング教育実践に関する研究が盛んになるに従い、それらの研究対象は、学習者の成果物であるいわゆる「作文」だけでなく、徐々に細分化が進み、研究上取り上げられる文章ジャンルは、レポートや卒業論文（劉2016、楊2016；2017；2018等）も含まれるようになった。このような学術的な文章ジャンルに着目すると、引用といったライティング教育に重要な特定の学習項目と研究倫理も深く関連することとなり、テーマの射程は広がりつつある。すなわち、研究対象の文章ジャンルは、学習者が自分の経験や意見を述べるタイプの一般的な作文とは異なる教育内容が必要となるわけである。

そのようなレポートや論文といった文章ジャンルを扱った教育については、日本の国内外の大学教員が語るライティング教育とその課題（村岡他2015）、学習者と指導者の各々の認識についての詳細な研究（楊2018）等が進められている。同時に、研究対象は、ライティング教育に関する学習者の心理面にも及び、書き手としての執筆不安への着目もなされ（田2019等）、新たな潮流が見られる。

上記のような先行研究の流れの中で、引用については、学術的な文章における引用そのものの現象への観察と分析（矢野2014、生天目・大島2017）や、引用を使用する学習者の問題点（楊2017）、先行研究の概観の記述をピア・レスポンス活動で改善した学習の実態（村岡2020）、さらには、引用の指導の工夫や課題の議論（向井他2020等）といったさまざまな研究が行われている。このように、ライティング教育で学術的な文章ジャンルを扱う場合に、学習者の引用使用の実態、その指導や学習活動の試み、および、それを克服するための種々の検討が行われているという現状がわかる。

このような先行研究の展開が見られる中、海外の大学の日本語専攻における卒業論文等のライティング教育への着目も見られるようになった。特に、中

国においては一般的に、学部入学後に日本語学習を初級レベルから開始し、4年次には卒業論文の執筆が課される。楊（2018）等は、このような日本語専攻における卒業論文の執筆過程とその指導に関わる、ミクロ・マクロ双方の観点からの研究として特筆すべきである。日本語で卒業論文を作成することは、学術的な研究成果を外国語で著すという意味で、負荷のかかる高度な活動である。楊（2018）は、そのような大学教育の重要な側面を取り上げ、そこに批判的思考力の育成の観点を明示的に取り入れた点で、価値ある研究であると言える。

ライティング教育に高度な読解能力が必要であることは論を俟たないが、卒業論文に限らず、より上位の学位論文や原著論文、各種レポート・報告書の執筆において、適切な引用を行う能力は、執筆以前に獲得しておくべき不可欠なものであると位置付けられる。そのような位置付けに関する教員側の研究倫理への意識が高くなければ、学生側の単位取得不可、および盗作・剽窃といった研究倫理にもとる行為を誘発しかねない事態となる。このような注意事項は、一般的な「作文」では扱われないものである。

上記の通り、研究倫理が重視される高度なアカデミック・ライティングが必要な卒業論文を、日本語専攻の4年次に研究の集大成として位置付ける場合、3年次までのライティング教育、および、卒業論文の指導の過程における、各々の内容・方法が有機的に機能することが求められる。それらの連続性の問題については、大島他（2016）が指摘している。大島他（2016）は、基礎作文・応用作文・卒業論文といった、有用な「漸進的指導」（p.34）の提案も行っている。

上記のような学部4年次の卒業論文執筆を意識した日本語ライティング教育を俯瞰的に再検討する必要性は、特に、卒業論文を課す日本語専攻を持つ中国の多くの大学において、きわめて重要である。つまり、日本語を対象言語とした狭義の言語教育から、学術的な活動への導入・橋渡しとして読解・ライティング教育が重要な役割を担っていると言えるわけである。

一方で、4.の「結果と考察」で後述する通り、中国の大学の事例とは異なり、卒業論文を課していない、国・地域の大学の日本語専攻も存在する。特に非漢字圏の国・地域において、例えば学部4年次学生の日本語能力が日本語能力試験N2レベルであれ

ば、日本語を用いて執筆することはかなり困難を伴う。そのため、大学教育としては、日本語による卒業論文執筆とは異なる他の研究活動によって、学術的な能力を向上させる工夫が必要であろう。

ただし、そのような非漢字圏にある大学院においても、調査協力者の事例から後述するように、日本語による卒業論文を課していなくとも、学習者が大学院に進学した場合には、日本語により修士論文や博士論文の執筆が求められ、読解・ライティング教育は、学位取得のためにも、引き続き重要な位置を占めるものである。さらに、大学院進学者のみならず、日本語専攻の少なからぬ学生が学部在学中に日本への短期留学（例：1年間）を行い、来日後のプログラム受講後に初めて、レポートといった長文の文章作成の必要に迫られ、苦慮するといったケースも一般的に見られる。上記の状況に加え、日本関連の企業に就職した場合にも、書記言語コミュニケーションが必要となることが十分に推測される。

ちなみに、日本語専攻の大学院は、本研究で調査対象とした地域においても、修士課程だけでなく博士課程の整備も進んでおり、今後、高学歴の学習者が日本語を用いた研究職や実務の場面で活躍することが、一層期待される。

上記のように、日本語専攻の学生にとって、母校の大学に在学中のみならず、留学、進学、および就職先での必要性から、読解とライティングの能力を一定程度以上に向上させておくことは、今後さらに重要なものに位置づけられると言える。

以上のような、卒業論文やその上位の学位取得、および社会での日本語を用いた実務場面等での活躍までを見据えれば、学部・大学院における読解・ライティング教育の実践とその効果を観察・分析し、来日後の教育への接続を検討する前に、授業担当者である教員の関連の見解がどのようなものであるかを把握しておくことが肝要である。それは、国・地域あるいは大学・専攻において種々の規範的な方針・ポリシーが決められているとしても、個々の授業実践にそれらを落とし込んでいく際に、どのような困難が日常的に存在し、それらがどのような方法で克服されているのか、あるいは、課題が残されているのかを、具体的な授業実践を担当する教員に調査して、見極めることが重要であると考えられるからである。そのように教員への調査を行って読解・ライティング関連の授業実践における実態把握が可能と

なれば、今後期待される書記言語コミュニケーション教育の充実に対して価値ある知見を提供することができであろう。本稿は、そのためのパイロット調査である。

次の3節では、本研究の具体的な調査の概要について説明を行う。

3 調査の概要

3-1 調査協力者

本研究は、少数の協力者を対象としたパイロット調査と位置づけ、漢字圏として中国から、非漢字圏としてタイの各大学の日本語専攻で教鞭を取る専任教員の合計5名から、調査協力を得た。

調査協力者の概要は、次の表1の通りである。

表1 調査協力者の大学教員に関する情報

教員	出身地域	母語	年代
A	東アジア	中国語	40代
B	東アジア	中国語	30代
C	東アジア	中国語	30代
D	東南アジア	タイ語	60代
E	東南アジア	タイ語	40代

いずれの協力者も、日本の大学への長期留学経験者であり、日本の大学院で博士学位を取得した研究者である。また、協力者の全員が博士論文を日本語で執筆しており、学位取得後も、口頭発表や講演、論文執筆において、母語以外に、使用言語を日本語とした研究活動の経験が豊富な研究者である。

学位取得前までの日本留学経験等の経歴は多様であり、表1に詳細は示してはいないが、全員が日本の大学院での学位取得後に、母国の大学に就職し、現在まで教鞭をとっている。大学での教育歴は、Cのみが2年で、他の教員は、10年未満から約30年である。A、B、Dは、学科長の経験者あるいは、調査時点で学科長であり、教育実践やカリキュラムについても俯瞰的な視点を有することが見込まれた。

3-2 調査の内容と方法

調査は、2020年11月初旬から12月初旬にかけて、それぞれ協力者の都合に合わせた日時で、一人あたり60分から75分程度、Zoomを用いたオンライン形式による半構造化インタビューにより行った。

調査協力者には、事前に調査の説明を書面で行い、承諾書を受け取り、インタビュー当日にも再び調査の概要を説明した。また、オンラインによるインタビューは、許可を得て録画した上で、調査後に、そのデータの文字起こしを行った。文字起こしが終了した段階で録画ファイルは破棄することとして、事前に各協力者に伝えておいた。

調査内容は、以下の表2に示した7点の内容を中心としたが、各協力者の所属先大学のカリキュラムや授業担当の内容等に応じて、柔軟に項目を選択して行った。表の項目の3、4、5については、伝統的には、海外においても、読解とライティングの教育が技能別に行われていると推測されたが、本研究では、卒業論文執筆や、大学を卒業するまでに必要な学術活動に資する学習・研究活動として、読解・ライティングの教育は極めて重要であるとの前提に立ち、特に取り上げて質問を行った。それに関連して、6の引用についても問題点やその対処方法について質問を続けて行った。

表2 調査の内容

質問項目	内容
1	基本情報：現在の読解・ライティング関連の授業担当の状況
2	上記の担当授業の具体的な方法と困難点
3	日本語専攻のカリキュラムにおける読解・ライティング教育の位置づけ
4	読解・ライティング教育の連携に関する見解
5	読解・ライティング教育で扱う文章ジャンルの選択
6	引用の指導の現状と問題点
7	今後の展望：読解・ライティング教育に関する課題や改善予定の内容等

4 結果と考察

本研究では、1.で先述したように、協力が得られた5名の中で、データの分析は、漢字圏と非漢字圏に分類して示すこととする。それは、上記の両者の間で、卒業論文の有無と学生の日本語能力の点で、読解・ライティング教育に関する種々の差が大きいと考えられたことによる。具体的には、調査協力者の漢字圏の大学が、いずれも卒業論文を課しており、かつ、当該日本語専攻における4年次学生が日本語能力試験のN1以上の日本語能力を持つこと、一方、非漢字圏の大学では卒業論文を課しておらず、当該

4年次学生の日本語能力が上記漢字圏ほど高くはなく日本語能力試験のN2合格程度であるという差である。

以降、4-1では漢字圏の大学の3事例、4-2では、非漢字圏の大学の2事例について、先述した表2の項目をまとめ直し、1) 読解・ライティング教育の現状と課題、2) 読解・ライティング教育への見解、3) 今後の展望の3点を含めることとして、各協力者の事例ごとに、次の4-1-1から4-1-3において、結果と考察を示す。なお、4-1の漢字圏の大学の記述では、卒業論文の指導に関しても言及する。

4-1 漢字圏の大学の3事例

4-1-1 協力者Aの事例

調査協力者A、B、Cのうち、Aの事例が、卒業論文の指導の改善が最も進んだ具体的なものであると観察された。

Aの事例の特徴を総括すると、①読解・ライティング教育への積極的な関与、②母語論文を活用した構成等の指導、③学生同士の協働学習の採用、④剽窃問題の減少、にまとめられる。以下、この順により結果と考察を示す。

まず、①については、Aによると、「初級作文」から「高級（上級：筆者注）作文」までは、日本語母語話者の教員が担当し、大学の3年次の前期に開講されている「論文写作」は、各種教材を参照し、試行錯誤しながら自身でオリジナル教材を作り使用しているという。Aはこの科目を担当して4年目になる。Aは日本留学時代から、ライティング教育に関心を持っており、現在の勤務先着任して数年後に、自ら進んで上記のような科目を担当した。

Aは、現在の大学に着任当初、剽窃が明らかな卒業論文を目にし、問題の深刻さを痛感した。上記の「論文写作」では、レポートや論文の具体的な書き方を扱う前に、論文とは何か、また、アカデミックな活動とはどのようなものかを徐々に意識させるように心がけ、かつ、論文のテーマや構成等について、実例を材料に、学生に協働で検討させているという。

次に、②母語論文を活用した構成等の指導については、Aによると、学生たちは、アカデミックな活動の経験は少ないものの、母語の中国語では研究の経験がある場合があり、そのことをふまえ、日本語の論文だけでなく、中国語の論文を提示して、日本語の論文との構成等の類似性についてあえて説明を

加えているという。Aの観察では、外国語である日本語で発表や執筆を行う際に、学術的な活動を行っているというより、「(日本語) 学習者として」発表する場合があるという。つまり、使用言語が外国語である日本語の場合、学術的な活動の一環であるという意識が希薄になりがちであると言えるものである。学生たちはこうした外国語による発表や執筆への難しさに対する心配があるため、Aは、それを払しょくするため、母語である中国語で書かれた論文も示しつつ、先輩たちも乗り越えてきたと激励し、困難さの克服を促しているという。

さらに、③学生同士の協働学習の採用について示す。学期最後にはレポートの提出が求められ、その最終目標に至る前に授業で発表が課されている。受講者数は学期によって変動があるが45～60名程度いるため、授業時間内に行える現実的な活動の質を考慮し、2クラスに分けて別の授業時間を設けているという。発表は、授業時間内に行わせるように工夫していたという。発表の前には、学生は5名程度のグループで、協働でコメントを伝え合い、改訂作業を進めるとのことであった。

論文執筆指導にあたっての具体的な注意点として、Aは、テーマ選択と読解について言及した。テーマ選択については、その検討と先行研究の収集を同時進行的に行う過程において、必要な資料入手が困難であったり、また、学生が批判的に読解を行えず、書かれている情報をうのみにしたりする傾向があると語った。Aは、こうした、論文完成までの過程を、教員の指導のみならず、ピア・レスポンスによって、他者からコメントを受ける重要性を意識させるように心がけていた。ただし、序論・結論部分については、構成の分析等を授業中に行いやすいが、個々の論文の本論については、時間の関係、および学生数が多いことから、十分には扱えない傾向があるという。

さらに、④剽窃問題の減少については、先述したように、Aは、着任当初に剽窃のひどい論文を見た経験があるものの、現在は、引用を例示しつつ、引用の必要性や正しい引用方法について指導を強化していることから、剽窃はそれほど多くなかった、とのことである。そこに至る過程において、Aは、授業での講義形式のみならず、学生全体で、読解とライティング、卒業論文までの準備に必要な事項を共有するために、学習活動を工夫し、協働学習を積極的に取り入れることによって、教育の質向上に尽

力している様子がうかがえた。

なお、Aによると、インターネット上の文献検索について、明確な指導を行っているとの指摘があった。すなわち、インターネット上の文献は、文章ジャンルが論文か報告やレポートの類かについて、区別が明確ではないという背景があり、また一方で、論文は、複数のランク付けがされており、そのランクによって論文の質がかなり異なるという実状についてである。学生は公開されている論文やレポートに対し、その質や価値の高低が自分では判断できず、不適切な文献を引用する、あるいは、孫引きするといった行動をとる傾向がある、とのことであった。

こうした、狭義の言語教育の枠を超えた、研究倫理にも関わる学術研究上の重要な問題は、卒業論文執筆の過程において、指導が強化されるべき点であり、情報の選択と引用は、卒業論文執筆前に習得すべき学習項目であることが明らかである。

なお、現在のように、インターネット上で多数の論文等の文献が入手しやすい時代においては、国・地域を問わず、適切な情報の入手方法と、情報の質を見極めて学術研究を行う重要性を、教員側は常に意識しておく必要があると考えられる。そのような重要性の意識は、教育成果の評価を左右するものであると言えるからである。

4-1-2 協力者Bの事例

Bの事例の特徴を総括すると、①カリキュラム上の問題、②卒業論文指導の負担、③卒業論文の位置づけの再考、にまとめられる。以下、この順により結果と考察を示す。

まず、①カリキュラム上の問題については、Bによると、2017年からカリキュラムが大きく変更され、日本語専攻であっても、1年次前期には、学生は、英語のみを学習し、日本語は発音のみ指導を受けるとのことである。つまり、従来と比べて、発音学習以外、半年間の日本語学習期間が減少したことになる。英語能力向上の一環によりカリキュラムが変更されたとのことである。

こうした中、2年次の後期より作文の授業が開始され、会話クラスと同様、日本語母語話者の教員が担当するという。採用人事も容易ではなく、その母語話者は、必ずしも専門が日本語教育学ではない。教育内容は、自分自身の生活を中心とした短いエッセイを作成させるものである。また、3、4年次に

は日本語の文章を読解する時間があり、その最後に、800-1000字程度の意見文、あるいは要約を行うといったライティング活動があるという。これらの場合、引用は不要とのことである。

②卒業論文指導の負担については、まず、3年前より、新たに、事前の論文指導のための授業が開講されたという変化がある。日本で博士号を取得した教員が当該の授業を担当している。その授業が開講された背景には、学生の卒業論文の書き方が適切ではなく、学生のみならず教員も非常に負担が重かったため、新たに授業開講の必要性が認識されたことによるという。そのような授業が開講されていても、Bの語りから、一般に、大学でレポートを作成する機会がほとんどなく、学生もアカデミック・ライティングについての予備知識もなく、教員1名につき10名程度の指導を行う実態もあり、いまだに負担となっていることがうかがえた。卒業論文の文字数は、8000字から10000字程度で、10月から翌年の5月までの間に完成することが求められている。卒業論文は、大学に紙媒体で保存されているものの、一般には閲覧が許されていないため、学生にとって、過去の先輩の卒業論文の実例を読むことはできない状況にある。

Bは、上記のような現状認識から、いわゆるアカデミック・ライティングは、学部生ではなく、大学院生レベルが取り組むものと考えられてもよいと語った。

B自身は、読むことも書くことも連携して指導を行うことが重要であると考えている。伝統的な日本語教育で行われてきたような初級・中級等の「作文」の作成から、学術的な活動の成果である卒業論文の執筆に至るには、テーマも作成方法も相当な差が存在するため、後者についての再考が必要な時期に来ていると考えられているという。

そこで、③卒業論文の位置づけの再考については、Bの所属先で、日本語専攻の学生は日本語ではなく、中国語で執筆してもよいのではないかという議論が教員間で生じていると語られていた。論文執筆という学術的な活動を行うために、教員側は、現在のカリキュラムの中で、学生の何を鍛えているのかといった疑問が提示されているとのことである。Bによると、テーマの選択から、個々の日本語表現の詳細に至るまで、全てを指導内容に含めるのはきわめて負担が重い、といった共通の認識が存在するという。

そのため、学生の卒業論文の日本語を徹底して添削するならば、それも時間を要することであり、論文の質の保証ができず、一方、研究の方法、統計的手法、調査票の作成方法等、研究の方法や手続きに関する指導に力を入れると、日本語のチェックが行き届かないといった現状分析があるとのことである。

Bの語りから、教員も学生も双方が、日本語専攻における卒業論文の、それぞれ作成と指導において少なからぬ負担を感じており、今後の卒業論文の位置づけをめぐる議論を受け、過渡期を迎えていると言える。

なお、Bは、中国では、読み書き話し聞く、の4技能と翻訳方法の習得が、外国語学院（筆者注：外国語学部）の役割と言われているものの、それぞれが必ずしも関連付けられて指導されているわけではないことは問題であると語った。また、Bは、トップダウンのカリキュラム変更で、授業時間に多くを費やすことができないため、短期間に技能別の授業で多くの教育内容を扱うより、実際のコミュニケーションのように、技能を組み合わせる教育の方が効果的であると語った。Bは、読解とライティングを組み合わせることには賛成であり、理想的であると考えているが、実際には、そのような技能複合型の指導を行うにふさわしい卒業論文指導の負担が、かなり大きいことで、日本語専攻の教育の現状について、少なからぬ課題を感じていた。

4-1-3 協力者Cの事例

漢字圏の調査協力者A、B、Cのうち、Cは、大学教員としての経験が最も短い。Cの事例の特徴を総括すると、①読解・ライティングの技能別授業と評価方法への批判、②授業場面での議論活性化の工夫、③文献の収集と質判断の課題、にまとめられる。以下、この順により結果と考察を示す。

Cは、日本留学時代の博士前期・後期課程において、ティーチング・アシスタントの経験があり、日本語学習者への学習支援の意識が高く、かつ、技能を組み合わせた豊かな学習活動を展開することに意欲的である。また、自身が卒業論文、修士論文、および博士論文の3論文を日本の大学在学時に執筆し、在学段階が上がるにつれて、論文執筆の難しさや指導の厳しさの必要性も強く実感するようになった。

そのようなCは、現在の勤務先大学において、学部2年次からの読解教育が、日本語能力試験のN2

合格を目的として試験問題を解くものであることに對して、懷疑的であった。読解は中国人教員、ライティングは日本人教員として、役割分担が明確であり、両者は会うこともない、と語っていた。また、C自身が授業で短いレポートを課して評価を行おうとしたところ、大学側から、レポートではなく期末試験で評価するようにと言われたという。なお、大学の入学試験には、600-800字程度の短い文章作成があるものの、入学後のレポートによる評価は行われないことに對して、違和感を持っていた。

Cは、レポート作成の重要性を認識している。Cによると、卒業論文向けの指導の授業担当には日本人教員も含まれていたものの、当該日本人教員はネイティブチェックを行うのみであったことから、現在は、日本で学位を取得した中国人教員に交代したという。つまり、Cは、卒業論文といった論文執筆の際には、ネイティブチェックより、論理性、客観性、根拠のある主張の存在、といった重要な学習項目があるという見解を有している。

次に、②授業場面での議論活性化の工夫について、Cは、学生達が議論を活性化することに慣れていないという背景に鑑み、例えば根拠が弱い主張の場合や、論理的ではなく主観的な文章が多い場合、教員がクラス全体の中で「ツッコミ」をしばしば行うと語った。論述時の根拠の必要性を示すため、例えば、白書からデータを引用するといった具体的な方法を指導していた。また、日本への交換留学の経験を有する学生の事例では、村上春樹の文章を研究したいというもので、ただその作家が好きだからという主観的な理由ではなく、人気の高い作品が売れた部数を具体的に紹介したケースを、評価していた。こうした根拠を提示して客観的に文章を書こうとする姿勢を、Cは当該学生の例を引き合いに出して「意識が違う」と語った。Cは、このようにして、主観的になりがちな学生の文章の展開や構成について、クラス内で、問題点を指摘して共有することにより、徐々に議論の活性化を促すように試みていた。

Cは、日本留学時代に、博士論文まで含めて論文執筆を行う際の、文章の客観性、論理性、根拠ある主張の重要性を強く意識しており、そのような論文執筆の基本的な姿勢と考え方を、自身が展開する授業においても、学部生の理解を促すように議論を深化することを心がけていると言える。

さらに、③文献の収集と質判断の課題については、

インターネット上での制限から、先行研究の収集が難しい場合があり、日本のCiNiiが見られない場合の問題や、無料で見られない情報もあると語った。また、国内で収集した論文であっても、1、2ページの文章は、論文として先行研究に値するかといった問題も指摘していた。ここにおいても、先述した協力者Aのコメント通り、インターネット上に掲載されている論文・報告は、公開されているからといってすべて信頼できるリソースではないことを、Cも同様に注意して指導を行っているという。このような中、Cは、論文とは何かを理解させつつ、論文を何度も提出・改訂させて、論文を完成に導きたいと願っているが、実際には、指導のコマ数と単位数が少ない状況があり、指導時間の不足が課題であると指摘していた。

Cは、日本留学時代の、特に学位取得のための論文執筆の厳しさを痛感しており、そこで経験して得た知見を、少しでも、現在の教育現場において、卒業論文の指導に役立てたいと願っており、理想的には、より多くの時間を卒業論文の指導に費やす必要があると考えていた。

4-2 非漢字圏の大学の2事例

4-2-1 Dの事例

Dの事例の特徴を総括すると、①分析的な読みを促す読解授業の展開、②論理展開把握の困難さの指摘、③大学院生向け授業の課題と展望、にまとめられる。以下、この順により結果と考察を示す。

まず、①分析的な読みを促す読解授業の展開については、Dが3年次前期に担当している授業における試みであり、扱う短い文章を多読させ、グループに分けて、正確に分析的に著者のメッセージを読み取らせるものである。クラス内での議論に加え、学期後半は、自分がインターネット上等で読みたい文章を選択して一人ずつ発表をさせ、その文章を選択した理由も発表の中で明確にさせるという。その文章は当該授業の1週間前に教員に送付を義務付け、教員から学生全体に共有することを習慣化している。発表時には、パソコンでプレゼンテーション用の視覚資料も準備させ、発表は日本語でなく母語でもよいとし、一人15分以内で、質疑応答を10分設けている。現在は29名の学生のうち、1名は日本語で発表するという。

Dは、この読解授業を通じて、学生が正確に、か

つ分析的に文章を読み込み、他者に紹介する活動により、自ら主体的に、発表者として責任を持って学ぶ姿勢を涵養していると言える。

次に、②論理展開把握の困難さの指摘については、Dの経験によると、従来の授業や試験での読解問題において、学生が文章を正確かつ分析的には読めず、文章のメッセージが把握できず、また事実と主張の各文の区別がつかない場合や、本論と結論の区別に迷う事例があったという。Dの分析によると、現状の学生の上記のような問題の背景には、短い文章でも、複数の段落がある場合、段落内外の論理展開、繋がりを把握することが困難であることが影響していると考えているため、先述した①のような授業を展開している。

つまり、Dは、単文レベルではなく、一定量の文章という長文から、構成や論理展開を適切に理解することが難しいという学生の事例を従来見てきたことから、自らその問題を減少させるために、授業展開を検討してきたわけである。

なお、Dの観察では、高校までの教育においても、10年程度でコミュニケーション教育方法が採用されるようになってきたとはいえ、学生は、母語においても基本的に選択問題に慣れており、自分の考えを明確に打ち出す練習は不足しているという。このことから、母語教育の影響も示唆され、外国語である日本語で、文献を分析的に読んで自身の主張を展開する困難さは依然としてあると考えられる。この点は、次の③にも関係する。

③大学院生向けの授業の課題と展望、については、大学院生の引用の問題、および今後の授業の改善に分けられる。

大学院生の引用については、自身の論文やレポートの中に適切に他者の論理に基づいたデータや記述を引用する必要があるにもかかわらず、Dからは、大学院生が「自分勝手に」都合よく情報を引用する傾向も指摘された。引用が不適切で「危ないと思った」とも語られていた。これも、先の②の問題と関係するもので、Dは、接続詞等による論理展開の正確な理解による文と文との「つながり」が影響していると分析している。そのため、問題のある事例では、他者の論文等の長文から、必要な引用が適切に行われていないという。

このような現状分析から、Dは、今後大学院において、アカデミック・ライティング能力の強化に向

けた授業や指導を再検討していきたいと語った。

Dの語りから、学術的な活動における読解の重要性と、読解から引用、引用を行うライティング活動の質向上に向けた深い接続性が指摘できる。先述したように、本来、読解とライティングはきわめて関連性のあるものであり、特に学術的な活動に必須の引用の指導の重要性を再確認するものである。

4-2-2 Eの事例

Eの事例の特徴を総括すると、①読解・討論クラスでの学習活動の改善、②学び手としての自主性の涵養、③読解・ライティングに必要な正確さの課題、にまとめられる。以下、この順により結果と考察を示す。

まず、①読解・討論クラスでの学習活動の改善については、Eは、ライティングのクラスは担当していないが、4年生を対象に10年程度行っている「読解・討論クラス」の試みを詳しく語った。それには、5年前に客員研究員で日本の大学に滞在した際に、新たな教育開発研究を自身で本格的に行ってきた経緯がある。Eは、まず、使用言語を全て日本語に切り替えたという。それまで、母語が教員も学生も同じという背景により、読解の学習活動の際にも日本語より母語を多く用いていたが、学生側には、使用言語として日本語が7割程度なら良いと判断していた調査結果が見られたことから、全て日本語を用いて行おうと挑戦したという。Eは、使用言語について「タイ人の先生だからタイ語を使えば良い」という単純な話ではないとも語っていた。

Eによると、一般に読解の授業は、伝統的には、正確に理解されているかどうかのチェックを行う活動が主なものであり、学生側が、関心を高く持って積極的に学習に取り組む姿勢が薄れがちであるという。Eは、学生が読解を扱った授業で、つまらない思いをしないようにとゲームやプレゼンテーション等多様な活動を取り入れて、能動的に読解・討論の活動に入れるように、工夫を重ねることで教育の質向上と学生のニーズ対応に腐心してきた。

具体的に、Eは、事前の活動として、本文の予習シートの送付、要約文の受理、授業では、タスクシートを活用し、読みを深めるピア・リーディングや討論を行い、さらに学期最後には、プロジェクトワークを企画して、資料の読解や簡単なアンケート調査等を行わせ、リフレクションを必ずさせるといっ

た多様な活動により、読解・討論クラスの充実を図っている。

ただし、上記の活動の過程で、Eは、プロジェクトワークの相談の際には、母語の使用を許可し、また、リフレクションシートの提出により、学生が何に困難を感じ、何が日本語を用いて達成できるようになったかの言語化を何度も行わせている。リフレクションシートの何度もの受け取りとチェックは、教員側にとっても負担とはなるものの、Eによると、学生の反応は、「タスクが多かったが実際に役に立った」との声がアンケートでも反映されているとのことであった。また、リフレクションシートは、母語で書いても良いとし、重要なことは、学習管理を学生が自ら行えることであると強く指摘している。

以上の学習活動のコーディネーションから、Eの取り組みの特徴は、単独技能での読解クラスにはない、複合的な技能の組み合わせの導入によって、日本語を用いた活動の結果としての成果物が「見える化」され、教員も学生も共に、その成果が意識化されていることであると言える。

次に、②学び手の自己主張については、上記の①の活動とも関連するものである。読解・討論活動を行うためには、予習を厳しく課し、「読んで理解した上で、自分で考えて行動すること」を徹底している。高校までにありがちな詰め込み教育から脱却する、大学生に適した学びの姿勢を涵養することに尽力している。Eによると、Eの国の教育では一般的に、「詰め込みが多く、枠組みが決まっており、教師は絶対的で、学生は怖がって自ら発言することを躊躇する傾向がある」とのことである。そのため、大学に入学してからも、自身の意見や主張を明確に述べることに、学生は慣れていない。

こうした現状分析から、Eは、読解はピア・リーディングの方法を活用し、発表とその準備には、グループごとに、発表係、話し合いの司会等を学生に決めさせ、教員が何度も介入せずとも学習活動が進むように、サポーター的な立場を貫いている。実際に、Eの国では、そのように教員がサポーター的な位置付けで授業運営されている方法は典型的ではないとしつつも、そのような方法こそが、学生の自主性を促す契機になるとの信念をEは有している。Eは、「(私たちは)生きてきた経験に基づいて(メッセージを)言っている。正しいか間違いか、はないのではないか。自分で意見を言ってみよう。社会人

になってから困るから、今練習しよう」と伝えているという。Eは、こうした広い視野に立った教員からのメッセージを学生に伝えている。つまり、読解・討論という外国語を用いた負荷のかかる活動を通して、学生に求められるコミュニケーションのための考え方や発信力の重要性を力強く訴え、発信者としての学習者の意識変容を促していると言える。

さらに、③読解・ライティングに必要な正確さの課題については、Eは、まず「正確さ」との折り合いをどうつけるかの基本的な問題意識を有している。つまり、日本語としての正確さの程度に深刻な問題があった場合、日本語の文章を適切に書けない事態となり、また、読解においても、正確に読み取れなければ、「要約の内容も形も崩れる」という。ライティング教育においては、文章の型があって、わかりやすい文章があるだろうという推測から、Eは、「正確さ」を、教員のチェックのみにならず、何らかのツールやシステムの開発によって、さらに読解・ライティングともに、教員と学生の負担を軽減する方法が開発されることを望んでいる。

Eは、先述したように、学生の日本語による発信力を促し、そのための基本的な正確さを獲得するためのツールやシステムの援用も期待しつつ、より効果的な教育の方向性を見定めていると言える。

5 結論と今後の課題

以上、漢字圏と非漢字圏の日本語専攻の大学教員5名に調査を行い、読解・ライティング教育に関する期待や課題について情報を得た。卒業論文への関与や読解・ライティング教育の担当に関する差異を超えて、どの教員も、大学における読解・ライティング教育の重要性を認識し、学習活動において種々の工夫を施し、かつ、カリキュラム・授業方法の改善を前向きに行っていたと言える。教員それぞれの取り組みは、大学・大学院において、正確な知識提供・知識習得にとどまらず、学生が主体的に論理的思考を深め、行動できるよう、また引用等の学術的なルール遵守を重視して教育課程修了までに、修了にふさわしい成果を上げることを強く求め続けていると結論できる。

この背景には、5名とも、日本の大学院で学位を取得するまでの長期的な留学経験をもとに、論理的な思考や分析的な読解、能動的な発信、および他者

との協働といった活動とその根底にある発想を、学術的な経験を教育現場に還元するような方法で、必要な教育に提供していたと考えられる。これらは、論文とは何か、研究とは何かの概念知識の総体である、論文スキーマ（村岡2014）の形成に役立つものと言え、狭義の言語教育を超えたものである。

各々の国・地域・大学によって、物的・人的リソースが異なるため、可能な学習活動も環境整備の必要性も一概には結論できないが、各協力者は現状を鋭く分析し、課題を明確に認識した上で、読解・ライティング教育への期待を有していることが明らかとなった。海外と日本における教育の接続について有用な資料が得られたと考えられる。

本稿では調査協力者が少数であり、それぞれの教育の現状について包括的に評価できたとは言えないが、一定の有用性が認められたものと考えられる。今後、こうした海外の教育事情や教員のビリーフについて、さらに調査・分析を進めていきたいと考えている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、学期中のお忙しい中、インタビュー調査に快く協力してくださり、貴重な教育関連の情報と見解を提示くださった調査協力者の5名の先生方に、心から感謝いたします。

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B)（「日本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究」）（課題番号19H01269, 研究代表者：村岡貴子）の助成を受けて行った。

注

- 1) 脇田（2017）は日本語教育における読解とライティングの連携の重要性について論じている。

参考文献

大島弥生・陳俊森・山路奈保子・因京子（2016）「中国の大学における卒業論文作成指導の過程からのアカデミック・ジャパニーズ教育への示唆—学習者・

指導者の認識に着目して—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, pp.28-36

田佳月（2019）「中国人留学生の学術レポート執筆不安とその変化—学習背景の違いに着目して—」『専門日本語教育研究』第21号, pp.53-60

生天目知美・大島弥生（2017）「資料分析型論文の資料引用における引用・解釈表現の特徴—歴史学／国際政治学／地域研究を対象に—」『専門日本語教育研究』第19号, pp.19-26

向井留実子・中村かおり・近藤裕子（2017）「引用で求められる「解釈」をどのように指導するか—学習者の作文事例から見た引用・解釈文作成の困難点と指導のあり方—」『専門日本語教育研究』第19号, pp.69-74

村岡貴子（2014）『専門日本語ライティング—論文スキーマ形成に着目して—』大阪大学出版会

村岡貴子・因京子（2015）「国内外の大学教員が語る日本語アカデミック・ライティング教育への期待と課題：自身の学習・研究・教育の経験から」『専門日本語教育研究』第17号, pp.35-40

矢野和歌子（2014）「人文・社会学系優秀卒業論文の分析—引用の使用に関する基礎調査—」『専門日本語教育研究』第17号, pp.67-72

楊秀娥（2016）「日本語専攻生の卒業論文作成に対する日本語専攻生の卒業論文作成に対する意味付けおよびその変容プロセス—中国の大学日本語専攻における実践事例に対する分析から—」『早稲田日本語教育学』第21号, pp.37-56

楊秀娥（2017）「日本語学習者の引用使用の実態調査—中国国内における日本語専攻課程の学部生の卒業論文を対象に—」『専門日本語教育研究』第19号, pp.57-62

楊秀娥（2018）『日本語表現力と批判的思考力を育むアカデミック・ライティング教育—中国の大学の日本語専攻における対話を活かした卒業論文支援を例に—』ココ出版

劉偉（2016）中国の大学における日本語専攻の学部生・大学院生に対する学術的な日本語の教育の実践と展望—華南師範大学の事例をもとに—」『専門日本語教育研究』第18号, pp.9-14

脇田里子（2017）『思考ツールを利用した日本語ライティング—リーディングと連携し論理的思考を鍛える—』大阪大学出版会